

群 教 セ	G05 - 03
	平 15.211集

創造的な表現を促す音楽科指導の工夫

—— 即興的に表現する活動を取り入れて ——

長期研修員 中島 宣子

研究の概要

本研究は、即興的に表現する活動を取り入れ、創造的な表現を促す音楽科指導の工夫を目指すものである。具体的には、即興的に表現する活動は、意図的な鑑賞をもとに即興的に音をつくって表現する活動、即興的に音を重ねて表現する活動、強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する活動からなる。これらの活動を取り入れて、児童が主体的、創造的に音楽を表現できるように指導の工夫をしたものである。

【キーワード：音楽—小 即興的に表現する活動 創造的 和楽器】

主題設定の理由

児童には社会の激しい変化に対応して、心豊かに主体的、創造的に生きていく資質や能力の育成が求められている。

このことを受けて音楽科教育では、児童が今まで培ってきた感性を發揮して、表現したい対象に働きかけることで、音楽の本質にふれ、自らの思いや願いを実現できるような学習活動を支える指導の工夫が必要である。

なぜならば、創造的な表現を行おうとする時、何を表そうとし、そのためにはどんな表現方法を使えばよいか、また、出来上がった表現はどんなのかなど、表現するための方向が定まりにくいからである。このことは、児童一人一人の表現への思いや願いを生かしながらも、教師が児童に身に付けてほしいと思うことと児童自身が身に付けたいと思うことにずれがあり、同じねらいに向けて学習が展開されていかなかったことに原因があると考えられる。そのため、今まで培ってきた感性を發揮しながら、自ら考え、判断し、自己を表現していく創造的な学習活動においては、どんなことができればよいのかということ、実感を伴って感じ取れるような指導の工夫が必要であると考えられる。

そこで、音楽をつくって表現する学習に、即興的に表現する活動を取り入れた。なぜならば、音楽科は、音楽を聴いたり、演奏をしたりするなど、具体的な学習活動を通して、様々な学習対象にかかわりながら、音楽的な特徴や価値を感じ取り、自己表現していく教科であるからである。そのため、教師と児童が、互いにねらいを共有できるような活動を通して、そこで感じ取ったことを拠り所としながら、自らの思いや願いを実現していくことが必要であると考え、即興的に表現する活動を取り入れた。

即興的に表現する活動は、意図的な鑑賞をもとに即興的に音をつくって表現する活動、即興的に音を重ねて表現する活動、強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する活動からなる。これらの活動を各段階に、意図的に取り入れる。音を感覚的に受け止める段階では、楽器固有の音色に十分親しみながら、音楽表現の可能性を探り、表現への見通しをもつ。ここでの活動は、児童が多様な音色を感じ取り、表現への思いや願いを抱きながら、どんな奏法にしたらよいかを判断するための拠り所となる。音を意味付ける段階では、感覚的に受け止めた音に、自分なりの表現意図をもって、意味付けていく。ここでの活動は、音の重なりから生まれる響きの美しさや豊かさにふれながら、音を重ねたりずらしたりするなど、構成を工夫するた

めの拠り所とすることができる。音楽を追求する段階では、自分にとって価値ある新しい音楽をつくり出していく。ここでの活動は、表現要素における変化からかもしだされる雰囲気の違いを感じ取り、それと表したいイメージとを照らし合わせて、ふさわしい表現要素は何かを判断するための拠り所となる。

このように即興的に表現する活動を取り入れることで、創造的な表現を促す音楽科指導の工夫ができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

創造的な表現を促す音楽科指導の工夫をするために、即興的に表現する活動を取り入れた有効性を実践を通して明らかにする。

研究の見通し

次のような各段階に、即興的に表現する活動を取り入れることで、創造的な表現を促すことができるだろう。

- 1 音を感覚的に受け止める段階において、意図的な鑑賞をもとに即興的に音をつくって表現する活動を行えば、奏法による音色の違いを感じ取り、表現への見通しをもつだろう。
- 2 音を意味付ける段階において、即興的に音を重ねて表現する活動を行えば、音が重なって生み出される響きを感じ取り、表現意図をもちながら、構成を工夫して表現するだろう。
- 3 音楽を追求する段階において、強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する活動を行えば、表現要素による雰囲気の違いを感じ取り、創造的に音楽を表現するだろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 主題及び育成したい児童について

「創造的な表現を促す」とは、児童が、音色や響きなど、音楽の諸要素を体験的に感じ取り、それらを拠り所として、自ら考え、判断しながら、思いや願いの実現に向けて創意工夫ができるように、積極的に働きかけることである。

本研究で育成したい児童像は、今まで培ってきた感性を發揮しながら、奏法による音色の違いや音の重なりから生まれる響き、各表現要素における変化を感じ取り、それを拠り所として、自分にとって価値ある音楽を創意工夫して表現する児童である。

このような児童を育成するためには、即興的に表現する活動とともに、次のような支援を行い、創造的な表現を促していく必要がある。

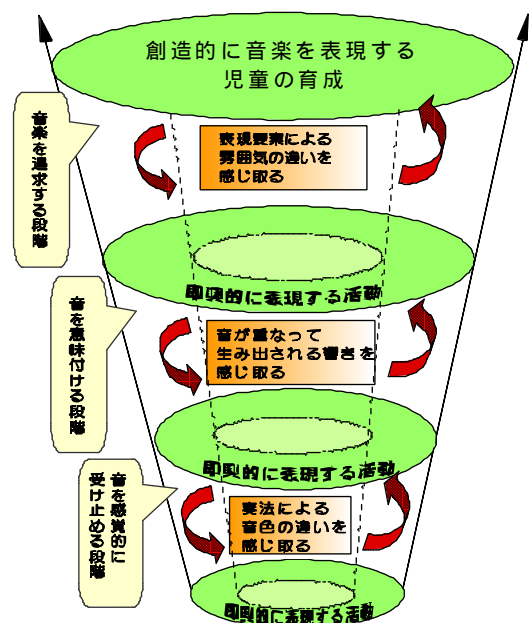


図1 研究構想図

音を感覚的に受け止める段階では、楽器固有の豊かな音色を体験的に感じ取れるように、児童が活動のめあてを意識したり、児童の生活や先行経験をもとに、自由な発想を生かして、多様な奏法を見つけたりできるような支援が必要であると考えます。

音を意味付ける段階では、音が重なって生み出される様々な響きを感じ取れるように、何を、どのように表すのか、自分なりの表現意図をもって、音とのかかわりを深めていく必要がある。そのためには、音の重なりによる美しさや響きを聴き、感じ取ったことと表したいことを照らし合わせ、表現意図を明確にしながら、構成の工夫ができるような支援が必要である。

音楽を追求する段階では、各表現要素の変化による違いを感じ取れるように、自分にとって価値ある新しい音楽をつくり出すことを目指して、音楽とのかかわりを深めていく必要がある。そのためには、表現要素の変化からかもし出される雰囲気の違いを体験的に感じ取れるような指導や工夫した表現を賞賛し、達成感を味わえるような支援が必要である。

(2) 「即興的に表現する活動」を取り入れることについて

「即興的に表現する活動」とは、教師が児童に身に付けてほしい音楽の諸要素の働きを意図的に体験し、感じ取る活動である。そこで感じ取ったことを拠り所として、自ら考え、判断して創造的な表現ができるように導いていく。

この活動によって、児童は、奏法による音色の違いや音の重なりから生まれる響き、各表現要素における変化を感じ取り、それをもとに創意工夫しながら自分にとって価値ある音楽をつくり出していくと考える。

図2は、即興的に表現する活動によって、創造的に音楽を表現する児童を育てる内容構想図である。

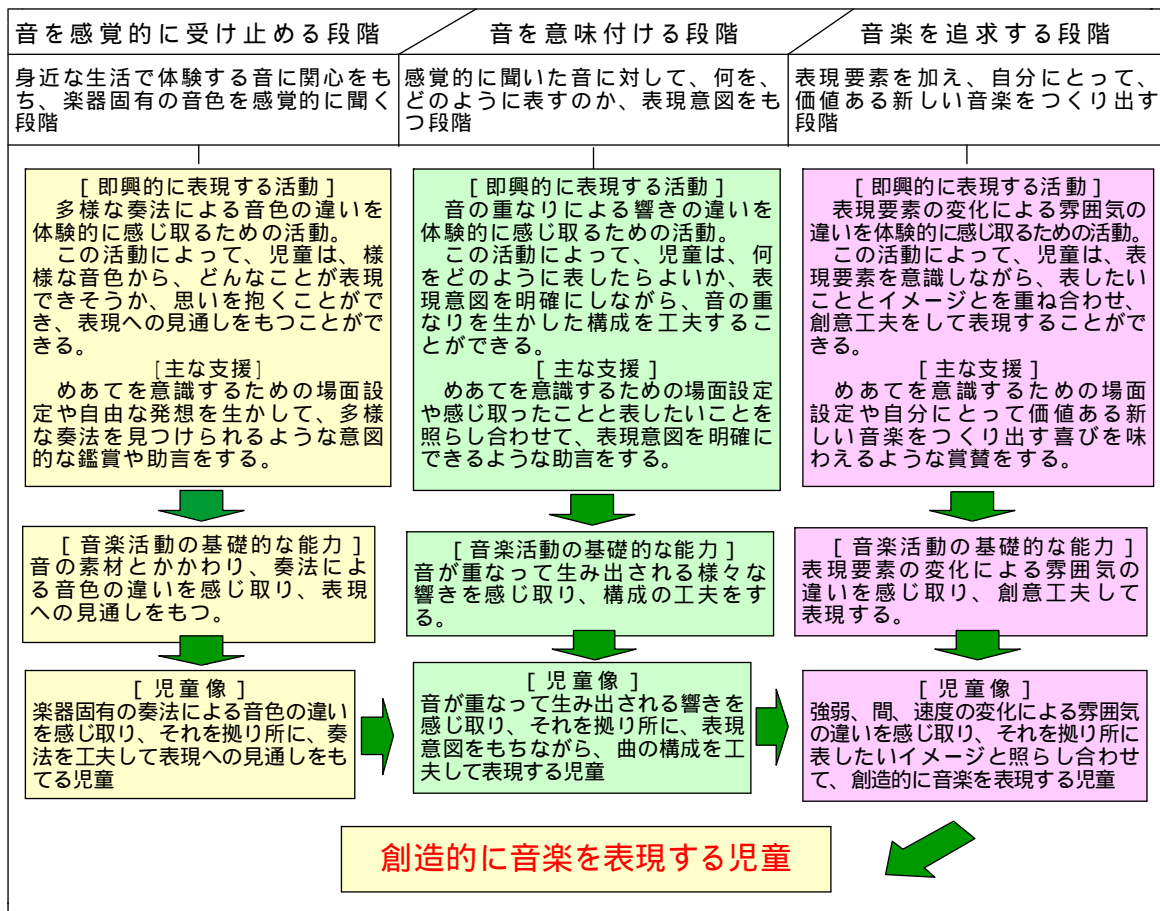


図2 即興的に表現する活動の内容構想図

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような方法で授業実践を行い、検証する。

(1) 授業実践計画

対象	群馬町立金古南小学校 6年2組（男15名 女15名 計30名）	題材名	日本の音に親しもう
期間	平成15年 10月上旬～11月上旬	授業者	長期研修員 中島 宣子

(2) 抽出児童

A男	音を直感的にとらえることは得意だが、表現する方法が分からないため、感じたことを工夫して表現することに結び付けようとする様子が見られない。即興的に表現する活動を行うことで、感じ取ったことを生かして表現方法の工夫ができるようにしたい。
B子	自由な発想で表現しようとする様子が見られない。表現方法を広げるヒントを教師が例示したり、グループ内で友達と表現意図を確認したりしながら、自由な発想を引き出したい。

(3) 検証計画

検証項目	検証の視点	検証の方法
見通し1	多様な奏法を知るための鑑賞をし、そこで感じ取った音のイメージをもとに、即興的に音をつくって表現する活動を行ったことは、奏法による音色の違いを感じ取り、表現への見通しをもつことに有効であったか。	・授業中における観察 ・「音のスケッチブック」の分析 ・VTRの分析
見通し2	中心のふし、低音部、つくった音を即興的に重ねて表現する活動を行ったことは、音が重なって生み出される響きを感じ取り、表現意図をもちながら、構成を工夫することに有効であったか。	・自己評価の分析 ・事後アンケートの分析
見通し3	強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する音楽ゲームを行ったことは、表現要素による雰囲気の違いを感じ取り、創造的に音楽を表現することに有効であったか。	

研究の展開

1 題材及び題材の考察

題材	日本の音に親しもう	教材	日本の音(暮らしの中の音)、わらべうた数曲、「線香花火」(宮城道雄 編曲)
----	-----------	----	---------------------------------------

児童が身近な生活体験で得た日本らしい音を集めることを出発点として、題材を構成していく。日本らしい音の中には、四季折々に聞く虫の音、夏に涼しさをもたらす風鈴の音、夏祭りにぎやかなかけ声や祭り囃子などがある。これらは、児童の生活や自然と結び付いており、幼い頃から馴染みがあり生活に根ざした音である。また、身近な音を取り上げることで、児童は、表そうとする音に対して共通の認識がもてる。そのため、音のイメージが共有でき、創作した作品を児童相互で聴き合う際にも、表現意図が分かりやすいと思われる。このことは、主体的に音とかがわり、創造的な表現を促すことへとつながっていくと考える。

わらべうたは、昔から、児童の遊びや生活を通して、歌い継がれてきた。ここで取り上げるわらべうたは、民謡調子に調弦した箏で、四本の弦のみで簡単に演奏ができる。児童は、これらのわらべうたを創作の中で曲のつなぎとして使ったり、わらべうた同士を重ねたりずらしたりして、即興的に表現することも容易である。

「線香花火」は、多様な奏法に気付くことをねらいとして鑑賞する。この曲は、箏の特性を生かした様々な奏法が使われており、四方八方に飛び散る線香花火の様子を繊細に表している。箏の伝統的な弾き方にとられない演奏は、児童の発想を豊かにし、多様な音楽表現の可能性を実感できると考える。

以上の理由から、本題材を設定した。

2 目標及び題材の評価規準

目標	楽器固有の音色や響きを感じ取り、構成や表現要素の工夫をして、自分のイメージに合った音楽づくりをする。			
観点	音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	身の回りのいろいろな音の音色や響きに注目し、進んで音楽づくりに生かそうとする。	音色や響きを感じ取り、それらを生かして曲の構成や表現要素を工夫しながら、自分のイメージに合った音楽づくりをしている。	自由な発想を生かして、奏法、曲の構成、表現要素を工夫して音や音楽をつくっている。	楽器そのものの音色の美しさや、奏法による多彩な響きのおもしろさを感じ取って聴く。

3 指導と評価の計画(全8時間計画の一部抜粋)

段階	時間	学習のねらい及び学習活動	支援()及び指導上の留意点(・)	評価の観点及び評価方法 十分満足できると判断する状況	見 通 し
音を感 覚的 に受 け止 める 段階	1	身近な生活の中から日本の音を探し、聴き取った音のイメージを表現して、日本の音に関心をもつ。 題材全体の見直しをもつ。 日本の音を聴き、そのイメージを図形楽譜に表す。 日本の音を箏で試し、つくった音を発表する。	題材全体の見直しをもてるように、学習計画やねらいとすることを事前に示す。 ・音からどんなことをイメージしたか分かるように、聴いた音を図形楽譜に表す。 自由な発想で箏を弾くように助言する。	関心:日本の音を聴いて、そのイメージを箏で表現しようとしている。 [表情や態度の様子] [音のスケッチブックの内容] 日本の音を複数見つけている。	見 通 し
	2	奏法による音色の違いを感じ取り、表現への見直しをもつ。 学習のねらいを聞く。 「線香花火」を鑑賞する。 箏を使って、様々な奏法で即興的に音をつくる。 即興的につくった音を発表し、聴き合う。 「音のスケッチブック」に感想等を記入する。	児童が活動のめあてをもてるように、事前にねらいを示す。 音のイメージがもてやすいように、図形楽譜に描きながら、鑑賞する。 自由な発想で、箏を弾くように促す。 自由な発想で弾いている児童を賞賛し、音楽づくりへの意欲を高める。 ねらいにそって、自分の活動をチェックできるように学習カードを工夫する。	鑑賞:箏の音色の美しさや、奏法による多彩な響きのおもしろさを感じ取って聴く。 [発言の内容] [音のスケッチブックの内容] 複数の奏法を見つけている。 感受:奏法による音色の違いを感じ取り、表現の見直しをもっている。 [音のスケッチブックの内容] [表情や態度の様子] 具体的なイメージをもつ。	見 通 し 1
音を意 味付 ける 段階	4	音が重なって生まれる響きを感じ取り、曲の構成を工夫する。 学習のねらいを聞く。 「たこたこあがれ」のふしに低音部とつくった音を重ね、その響きを感じる。 表したいストーリーをつくる。 「音のスケッチブック」に感想や気付いたことを書く。	曲の構成を工夫できるように、構成カードを活用する。 即興的に音を重ねて表現する活動を行うことによって、響きの違いを体験的に感じ取れるようにする。 感じ取ったことを生かして、音を重ねたり、つなげたりして構成を工夫できるように声かけをする。	感受:音を重ねた時の響きを感じ取り、それを生かして構成を工夫している。 [発言の内容] [音のスケッチブックの内容] 表現意図をもっている。	見 通 し 2
	5	表現要素による雰囲気の違いを感じ取り、表したいイメージと照らし合わせて、表現を工夫する。 学習のねらいを聞く。 音回しゲームや1分間音楽を行う。 2種類の音楽ゲームで気付いたことを発表する。 「音のスケッチブック」に感想等を記入する。	音楽ゲームの仕方やねらいを説明することによって、ねらいに沿った活動ができるようにする。 音楽ゲームを行うことによって、表現要素を体験的に感じ取れるようにする。 ・工夫した表現を具体的に賞賛し、表現した成就感を味わえるようにする。 ・表現要素を加えた理由を書くように促すことによって、表現意図がより一層明確になるようにする。	感受:強弱、間、速度の変化を感じ取り、それを生かして表現を工夫している。 [表情や態度の様子] [つぶやきの内容] [音のスケッチブックの内容] 表現意図と表現要素の結び付きを意識している。	見 通 し 3
音楽を 追 求 す る 段 階	6 7	奏法や構成の工夫、表現要素の変化を取り入れ練習を行う。 学習のねらいを聞く。 グループの課題を明らかにする。 各グループで練習を行う。 「音のスケッチブック」に感想等を記入する。	各グループの活動のめあてを確認することで、めあてに沿った活動ができるようにする。 ・集積した学習カードをもとに、活動を振り返り、グループの課題を明確にする。 ・独創的な工夫があるグループは、随時発表し、聴き合い、賞賛する。	感受:奏法や構成、表現要素を修正したり、新たに付け加えたりしている。 [発言やつぶやきの内容] [音のスケッチブックの内容] 工夫した理由が明確である。 関心:自由な発想を生かした音楽づくりを楽しんでいる。 [表情や態度の様子] [音のスケッチブックの内容] 複数の工夫を提案している。	見 通 し
	8	つくった音楽を発表し、工夫した表現についてよかったことを出し合う。 活動の観点を説明する。 各グループの発表を聴き、工夫した表現でよかったことをメッセージカードに書いて交換する。 「音のスケッチブック」に感想を記入する。	観点を示すことで工夫した表現に着目して、発表を聴くことができるようにする。 ・メッセージカードは、賞賛や励ましの言葉を添えて、渡すように声かけをし、表現した成就感を味わえるようにする。 ・工夫した表現に着目して、メッセージカードを記述している児童を意図的に指名し紹介する。	感受:表現意図を明確にして演奏したり、表現の観点に沿って聴いたりしている。 [演奏の内容] [音のスケッチブックの内容] 表現意図に沿って、聴いたり演奏したりしている。 技能:自由な発想で音の出し方を工夫して演奏している。 [演奏の内容] 多様な工夫をし、演奏している。	見 通 し

研究の結果と考察

1 多様な奏法を知るための鑑賞をし、そこで感じ取った音のイメージをもとに、即興的に音をつくって表現する活動を行ったことは、奏法による音色の違いを感じ取り、表現への見通しをもつことに有効であったか

児童に、資料1を提示し、「線香花火」の鑑賞から感じ取った音のイメージを箏で表したり、他にもどのような音の出し方があるか試したりする活動を行うことを知らせた。そして、生活の中にある日本らしい音と箏の音色を照らし合わせ、どのようなことが表せそうか、表現への見通しをもつことが活動のねらいであることを確認した。

次に、「線香花火」の鑑賞で、どのような音をイメージしたのか、児童にたずねた。児童から「かすれた音があった。」「高い音から低い音へとガラランと弾いていた。」「指ではじいていた。」という回答があった。その後、鑑賞で聴いた音を即興的に試した。

弦を爪でこすったり、指で一つ一つの弦をつまんではいじいたりしていた。さらに多様な奏法を引き出せるように、「箏のどの部分でもよいので、弦の他に音が出る部分があるだろうか。」と問いかけた。児童は、箏の様々な箇所を叩いたりこすったりしながら、耳を近づけて音色や響きの違いを確かめた。箏の技法の一つである『押し手』を例示すると、児童は真剣な眼差しで見つめ、「音が曲がった。」「幽霊が出てくるみたい。」という言葉で表現した。児童は、めいめいが『押し手』を実際に試し、弦を押した時の音色の違いを確かめていた。

A男は、鑑賞から、「だんだん音が大きくなる。」

「下から上に向かって弾いていた。」ということを感じ取った。そのことをひし形の周りにギザギザの線を使って、音のイメージを図形楽譜に表した。その後、これらの弾き方で音を試していた。最初に、爪の向きを変えながら親指だけで弾いたり、耳を近づけて一つ一つの弦を細かくはいじたりしていた。さらに、弦を端から端まで使い、流すように音を出していた。その後、左手で弦を押さえ、音色の違いを聴く様子も見られた。A男は、箏を様々な方法で試した結果、「流して弾く」「はじく」「弦を押さえながら弾く」などの奏法に気付き、

感想を記述した(資料2)。ここから、楽器固有の音色を感じ取っていることが分かる。A男は、弦をこすったり、弦の間に紙を挟み、振動したりする時の音色を生かして、資料3のようなイメージで『虫の鳴き声』を表すことができるのではないかと表現への見通しをもった。しかし、『押し手』の奏法を試してみたがうまくいかなかったというA男には、箏の豊かな響きを出すことによって、『押し手』ができることをコメントした。

B子は、「線香花火」から聴き取ったことを、「音の強弱があった。」「小さくて悲しそうな音」と書いた。教師は、「音の強弱を出すのにどんな弾き方をしていた?」と問いかけたとき

資料1 「音のスケッチブック」

「音のスケッチブック」

- 「線香花火」を鑑賞して感じた音のイメージを、絵や線、言葉などで表しましょう。
- 他のどんな音の出し方があるか、試してみましょう。

1つ目	2つ目	3つ目
チェック	チェック	チェック

- チェックをしよう。

1 聴いた音のイメージを絵や線、言葉などで表せましたか?	
2 即興的に音をつくって試すことができましたか?	
3 どんなことが表せそうか、見通しをもつことができましたか?	

資料2 抽出児の感想とコメント

A男の感想と教師のコメント

ふしぎな音がして楽しかった。先生が弾いた音がくねくねしたような音でももしろかった。やってみたらうまくいかなかった。

【教師のコメント】
音がくねくねする弾き方は、だれでもできます。今度、爪を付けて、箏の豊かな響きをみんなで味わってみましょう。

B子の感想と教師のコメント

箏は、とても難しかったです。だけど、とても楽しみです。箏の裏を太鼓みたいに使ったのがいいと思った。先生が弾いたやり方のくねくねした音がよいと思った。

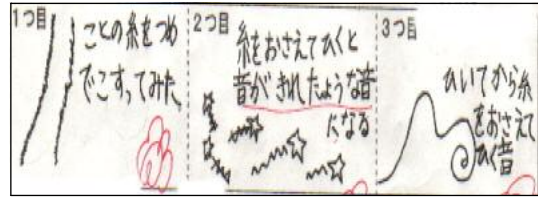
【教師のコメント】
箏の底を叩くことをよく発見しましたね。よい音がするでしょう。ぜひ、音楽づくりに使ってみてください。

資料3 A男の見通し



る「糸のこすり方をだんだん大きくしていた。」と答えた。その後、箏で即興的に音をつくり、新たな奏法を見つけ、資料4のように描いた。B子は、これらの奏法で感じ取った音色を基に、『金魚すくいをして、金魚が網から落ちそうになるところ』を表現したいという、思いを抱いた。具体的な見通しは、この時点では、明確になっていなかった。しかし、箏をただ単に、弦を使って音を出すだけでなく、『押し手』の奏法や太鼓のように叩く奏法に興味をもっていることが資料2の感想から分かる。叩いて音を出す奏法を賞賛し、音楽づくりに生かすようにという助言を書いた。

資料4 B子が即興的につくった音



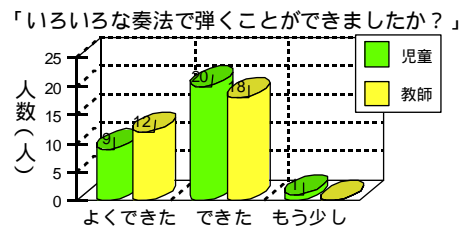
資料5は、自由記述による事後アンケートの内容を分類、整理したものである。即興的に音をつくって表現する活動によって、児童は、様々な奏法で音を試し、その中から、表したいことを見つけ、表現するための見通しをもてたことが分かる。また、資料6は、奏法に関する児童の自己評価と教師の評価を比較したものである。この結果から「よくできた」と「できた」の間に、わずかなずれがある。また、「もう少し」と自己評価をした児童が1名いる。しかし、この児童は、「流し弾き」と「こする」奏法を見つけていた。そのため、二つの奏法を見つけられたことを賞賛するコメントを記述し、自信がもてるようにした。

資料5 事後アンケート

- 「即興的に音をつくって表現する活動を行ったことは、どんなことに役立ちましたか？」(30人回答)
- ・表したいことが見つかった。(21人)
 - ・どんな音が分かった。(5人)
 - ・弾いてみようと思った。(2人)
 - ・強弱や響きがあった。(2人)

以上のことから、多様な奏法に気付くための鑑賞をもとに、そこで感じ取った音のイメージを即興的に音をつくって表現する活動を取り入れたことは、奏法による音色の違いを感じ取り、表現への見通しをもつことに有効であったと考える。

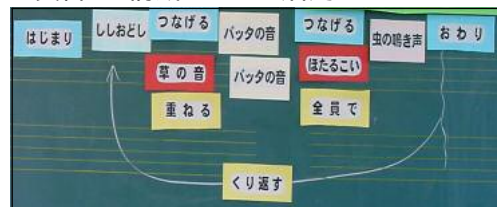
資料6 自己評価と教師の評価



2 中心のふし、低音部、つくった音を即興的に重ねて表現する活動を行ったことは、音が重なって生み出される響きを感じ取り、表現意図をもちながら、構成を工夫することに有効であったか

前時の学習カードに書かれた児童の活動の問題点を取り上げ、構成カードを使って、児童とやりとりをすることで、学習のめあてを意識できるようにした(資料7)。

資料7 構成カードの活用



次に、児童と教師の3人で、既習曲の「たこたこあがれ」のメロディー、二弦と一弦を交互に弾く低音部、風をイメージしてつくった音を重ね、聴き合った(次ページ資料8)。また、児童が川の流れをイメージしてつくった音を前奏と後奏に取り入れた。そして、児童のつくった音を重ねたりつなげたりして、即興的に表現する活動を全員で行った。活動後、児童は、即興的に音を重ねて感じ取ったことを「かっこいい。」「豪華な音。」「こんなこともできるんだ。」と感想を述べた。その後、

T:「『どんなことを表すのが、決まったけれど、これをどうつなげたらよいか、困っています。』という内容です。考えてみましょう。」(虫の鳴き声を表したいグループを例にあげ、構成カードを操作し考えた)

T:「三つの音の組み合わせ方がありますか？」

S1:「ちゃんと ちゃんを一緒に弾く。」

S2:「全員で一緒に弾いたらどうかな。」

S3:「一つずつ、つなげてもいいかな。」

児童は、グループで音を重ねたり、ずらしたり、曲の始まり方や終わり方を工夫し始めた。

A男のグループは、『日本の夏』をテーマにし、「川の流れを最初と最後に入れます。虫は、『ほたるこい』と一緒に弾き、花火は途中から入ってきます。」と、表したいイメージを学習カードに記述した。A男は、音を重ねた時の感想を資料9のように記述している。左手で弦をはじいて音を出し、右手で弦をこする奏法で音を重ね

ることを試みた様子が、この感想から分かる。その後、A男のグループは、表現したいものや様子を図形化し、構成表にまとめた(資料10)。川の流れを表したい児童同士で音を重ねたり、虫の鳴き声^{せみ}を表したいA男と蝉の鳴き声^{せみ}を表したい児童とで、ずらしながら音を重ねたりした。即興的に音を重ねて表現する活動後、児童は、音の重なりや川の水を使って前奏とするなど、自分たちで考えて、構成を工夫していることが分かる。

B子のグループは、『日本の祭り』をテーマとし、

「静かなところで、お祭りの太鼓の音が鳴り、ガヤガヤしている。その中で、金魚すくいをしている人がいたり、静かに風鈴の音が鳴っていたりする。」という様子を表したいと考えた。B子は、即興的に表現する活動を行った後、感想に「繰り返しやつなぎ、重ね方、全員で弾いてみるなど、構成の方法がいろいろ分かった。」と記述した。その後、このグループは、音を重ね、繰り返しの部分をつくった。B子は、金魚が取れそうでとれなくて落ちたイメージを、友達と一緒に音を重ねて表現した。理由を聞くと、「友達に低音で水がびちゃびちゃしている様子を表してもらい、自分は、その中で金魚が泳ぎ、捕まりそうになって飛び上がることを表したいと思った。お祭りが盛り上がる様子を表したいから。」と答えた。このようにB子は、音の重なりを活用して、何をするのか、表現意図をもっていることが回答した理由から分かる。

資料11は、自由記述による事後アンケートの内容を分類、整理し、まとめたものである。この結果から、児童は、音を重ねた響きをきれいな音と感じ、また、この表現方法を音楽づくりに活用した児童は24人いた。さらに、資料12は、構成に関する児童の自己評価と教師の評価

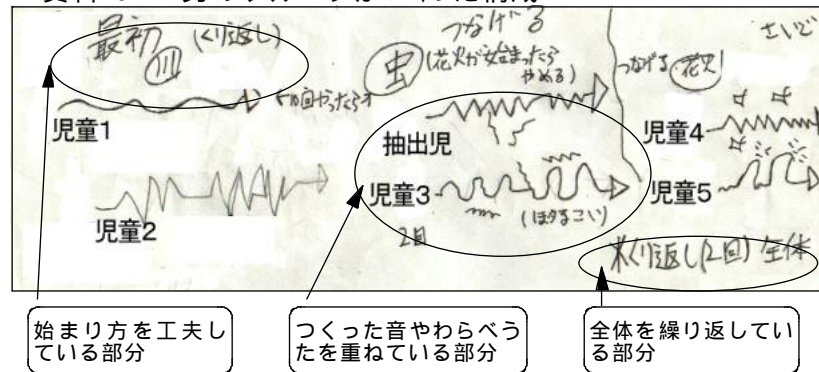
資料8 音を重ねている様子



資料9 音を重ねた時のA男の感想

音を出しながら、箏のひもを爪でこすってやってみたけれど、こすりながら音を出すのが難しい。練習してできるようになりたい。

資料10 A男のグループが作った構成



始まり方を工夫している部分

つくった音やわらべうたを重ねている部分

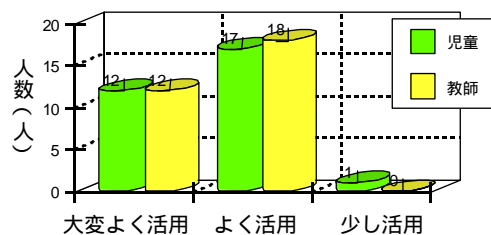
全体を繰り返している部分

資料11 事後アンケート

「即興的に音を重ねて表現する活動から、感じたことや役立ったことは何ですか？」(30人回答)
 ・音を重ねるときれいなことが分かり、この方法を使った。(24人)
 ・友達と協力し合えた。(5人)
 ・箏と私と感覚が合う。(1人)

資料12 自己評価と教師の評価

「音の重なりを感じ取って、構成に活用しましたか？」



を比較したものである。児童の自己評価と教師の評価結果は、ほぼ同じ数値を示している。これは、即興的に音を重ねて表現する活動を取り入れたことで、児童は、音の重なりから生まれる響きを感じ取り、それを音楽づくりの拠り所として、何をどのように表せばよいのかという表現意図をもつことができ、自分で表現を考えて、判断できるようになってきたためと考える。

以上のことから、即興的に音を重ねて表現する活動を取り入れたことは、音が重なって生まれる響きを感じ取ることができ、表現意図をもちながら、構成を工夫することに有効であったと言える。

3 強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する音楽ゲームを行ったことは、表現要素による雰囲気の違いを感じ取り、創造的に音楽を表現することに有効であったか

『音楽ゲーム』を行うことによって、強弱、間、速度の変化による雰囲気の違いを感じ取ることがねらいであることを児童に知らせた。

次にクラス全員で、一重円になり、次のように『音回しゲーム』をした。最初に、一定の拍の中で、手拍子を1回打ち、順次隣の人へ音を回した。全員が一定の拍の中で、音を伝えられたことを確認した。その後、速度を変化させ、隣の友達へできるだけ速く音を回すように声かけをした。児童は、なるべく速く音を伝えようと、速度の変化を感じ取りながら音を回す様子が見られた(資料13)。

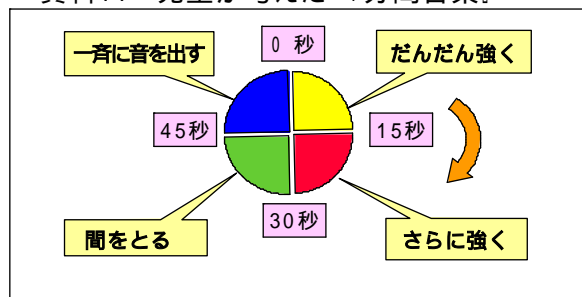
資料13 『音回しゲーム』の様子



今度は、「自分の好きな間をつかって、隣の友達に音を伝えましょう。」と投げかけた。児童は、楽しそうな表情をして、身体全体を使って、大きな動作で間を十分にとって音を伝えたり、小さな動作で音の間隔を縮めて素早く音を伝えたりする様子が見られた。その後、できるだけ速く音を回し、しかも、だんだん音を強くしていくように言った。児童は、教師から出発した音をもとに、徐々に音を回す速度をあげ、手拍子の叩き方を強めていった。児童は、伝えられた音の強さと速度を感じ取り、自分の手拍子を打つ強さと速度を決め、隣の友達へ音を回していた。次に、箏を使って、強弱、間、速度の変化を即興的に取り入れた『1分間音楽』のゲームを行った。教師が1分間を表す時計の役割をし、どのくらいの時間に強弱や間、速度の変化を取り入れるか、児童と相談して決めた(資料14)。

活動後、児童は「一斉に音を合わせるとすごい迫力。」「間があると雰囲気が変わる。」「速度を変化させて、音を強くすると何かが迫ってくるような感じがする。」などと感想をもった。その後、自分たちの表したいイメージに合わせて、強弱、間、速度の変化などの表現要素を加えて、グループごとに練習を行った。日本のお正月をテーマにしたグループは、友達と分担して、音をずらし、そこに強弱を加えて、コマがぶつかったり、離れたりするイメージを音で表した。

資料14 児童が考えた『1分間音楽』



活動後、児童は「一斉に音を合わせるとすごい迫力。」「間があると雰囲気が変わる。」「速度を変化させて、音を強くすると何かが迫ってくるような感じがする。」などと感想をもった。その後、自分たちの表したいイメージに合わせて、強弱、間、速度の変化などの表現要素を加えて、グループごとに練習を行った。日本のお正月をテーマにしたグループは、友達と分担して、音をずらし、そこに強弱を加えて、コマがぶつかったり、離れたりするイメージを音で表した。

A男は、『音楽ゲーム』を行った際に、回ってきた音をよく聴き、強めの音で、隣の友達に音を回した。『1分間音楽』では、夢中になって虫の鳴き声をこする奏法で表現していた。A男は、即興的に表現する活動の感想を次ページ資料15のように記述した。タイミングが難しいと表現しているが、これは間を感じ取って生かそうとしているためであると考えた。A男は、だんだん音を小さくすることによって、自分のイメージした『虫の鳴き声』を表そうとしてい

ることが、資料15の感想から分かる。

B子は、『音楽ゲーム』の感想と表現を工夫した理由を資料15のように記述した。強弱を付けた時、「悲しい」「激しい」と感じ、

表現要素の中の強弱を取り上げ、その変化によって、曲の雰囲気が変わることを感じ取っていることがこの感想から分かる。その後、B子のグループは、強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する活動後、曲の始まり方を工夫し始めた。最初は、祭りの始まりを一人で箏の底を叩いて表現していたが、活動後、複数で底を叩き、徐々に人数を減らして強弱を付ける工夫を行った。

資料16は、自由記述による事後アンケートの内容を分類、整理した結果である。このことから、児童は、強弱や間、速度の変化を感じ取ること、それらを意識し、表現を工夫することに役立てたことが分かる。さらに、資料17は、児童の自己評価と教師の評価を比較したものであるが、ほぼ同じ数値になっている。このことは、即興的に表現する活動を取り入れたことで、児童が、感じ取ったことを拠り所として、どんなことができればいいのか、意識しながら、音楽づくりをすることができたためであると考えられる。その結果、児童は、実感を伴って音楽活動の基礎的な能力を身に付け、創造的に音楽を表現することができたと考えられる。

以上のことから、強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する『音楽ゲーム』を行ったことは、表現要素による雰囲気の違いを感じ取り、それを拠り所として、自分で考え、判断して創造的に音楽を表現することに有効であったといえる。

研究のまとめと今後の課題

即興的に表現する活動を取り入れたことで、児童の意識の中に、どんなことができればいいのか、表現を判断するための拠り所ができ、その後の音楽づくりにおいても、自分で考え、判断しながら、創造的に表現することができた。

即興的に表現する活動を意図的に取り入れることによって、児童は、音色や響き、表現要素など、音楽活動の基礎的な能力を獲得しながら、それらを音楽づくりに活用することができた。

各学習段階において、児童一人一人の音楽活動の基礎的な能力を考慮した、きめ細やかな支援のあり方を模索し、さらに充実、改善を図っていく必要がある。

資料15 抽出児の感想と工夫した理由

A 男の感想	B 子の感想
音回しゲームをやった時、間を入れるタイミングを <u>考えるのが、ちょっと難しかった。</u>	音回しゲームは、「 <u>間のあけ方で随分音の感じが違うのだな。</u> 」と思った。1分間音楽は、「 <u>強弱で激しそうな感じになったり、さみしそうな感じになったりするんだな。</u> 」と思いました。
A 男が表現を工夫した理由	B 子が表現を工夫した理由
箏の弦をこするのを <u>だんだん小さく</u> することにした。理由は、 <u>だんだん小さくなっていく方が虫の鳴き声という感じがする</u> と思ったから。	最後に箏の底を叩くところは、 <u>順番に入って順番に抜けていく</u> ことにした。私は、Cさんと一緒に、 <u>金魚が捕れそうで捕れなくて、網から落ちたところを</u> 表そうと工夫した。

資料16 事後アンケート

「強弱、間、速度の変化を取り入れて即興的に表現する活動から、分かったことや役立ったことは何ですか？」

(30人回答)

- ・強弱、間、速度を意識できた(7人)
- ・強弱の付け方が分かった(6人)
- ・発表の時使えた(6人)
- ・間の取り方によって、速さを変えた(4人)
- ・強弱や間を付けたら前よりもよくなった(3人)
- ・速度を感じた(2人)
- ・音の感じが違って来た(1人)
- ・箏に表情がでて来た(1人)

資料17 自己評価と教師の評価

「強弱、間、速度の変化を活用しましたか？」

